

V.P.ダニーロフ 再読 ―批判的継承に向けて―(Ⅲ)

西山克典

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第11巻第1号(2012年9月)抜刷

【論文】

V.P.ダニーロフ 再読 — 批判的継承に向けて — (Ⅲ)

西 山 克 典

はじめに

- I. ヴィクトル・ペトローヴィチ・ダニーロフの経歴
 - II. 対抗 — 歴史学における反スターリン主義の闘い
 - III. 敗退 — ソヴェト史学の転換 以上 (第9巻 第2号)
 - IV. 「復権」から守衛へ — ベレストロイカのなかで —
 - V. 最後の闘い
 - VI. 農業改革への批判 以上 (第10巻 第2号)
 - VII. 研究活動と「政治」 以下 本号
 - VIII. 遺稿の内容
- 結びにかえて

VII. 研究活動と「政治」

このように現実の政治のなかで活動しつつ、ダニーロフはソ連崩壊という新しい状況のなかで、ソ連体制下では利用が禁圧あるいは一部に限定された史料の公刊を強く押し進めていった。例えば、1928-29年に開催された共産党の中央委員会、その五つの会議の速記録全てが、付属資料を含めて全面的に公開された。各巻にはダニーロフをはじめとする編者が「序 解説」を共同で寄せ、ネップがいかに破壊されたかを示

1 Как ломали НЭП. Стенограммы пленумов ЦК ВКП(б). 1928-1929 гг. в 5-ти томах. М.,2000.

2 Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. документы и материалы в4-х томах. Под ред. А.Береловича и В.Данилова. М.,1998.また、『1902 - 22年ロシア農民革命史料集』として、一連の史料集が出された。В.Данилов и Т.Шанин, под ред., Крестьянская революция в России 1902 -1922. документы и материалы. Крестьянское восстание в Тамбовской губернии в 1919-1921 гг. Антоновщина. Тамбов,1994.//Крестьянское движение в Поволжье. 1919 - 1922. М.2002. //Крестьянское движение в Тамбовской губернии. 1917-1918. М.,2003.

そうとした。¹ さらに、1920年代のソヴェト農村に関するソ連治安担当機関の資料や『1902-1922年 ロシアの農民革命』に関する史料集の公刊に、彼は編者として大きく尽力したのである。²

また、西側の研究に呼応しながらソ連の集団化について、ソ連の農業集団化を「黒く塗りつぶすこと очернение」には批判的に対応していく。1988年にダニーロフが『歴史の諸問題』誌編集部へ宛てた書簡論文では、西側で先行してなされた農業集団化の犠牲者の規模について対話を進めている。彼は、R.コンクエスト『大テロル』にみられる農業集団化の犠牲者の規模に関する西側での論争を参照しつつ、カー学派のディヴィスらの論拠の科学的客観性に共感を示しつつ、集団化による犠牲者（クラーク撲滅と飢饉）の数を確定する作業を行っている。ここで、さまざまなイデオロギー的傾向の学者のあいだでの共同での学術的審議と探求の必要なことを、ダニーロフは訴え、科学性と客観性にもとづく論議を呼びかけたのである。³

この科学性と客観性に基づく議論を求める姿勢は、彼の生前に公刊されたものとしては恐らく最後とおもえる論考にも窺える。『歴史の諸問題』誌（2004年2月号）には、編集部への彼の「書簡」が掲載されている。ここで、ソ連解体後の改革の破滅的状況への反動としてスターリンへの回帰が見られることを批判し、この書簡の最後でスターリンによる粛清の犠牲者（1936年1月1日～38年7月1日）の民族構成を示し、「人民の敵」とされたのは主要には「ユダヤ人」としスターリン体制を擁護するかのような議論を「残念ながらアンチセミチズム以外、何も反映していない」と厳しく対応していた。⁴

彼はこの時期に農業の集団化のみならず、西側で蓄積されてきた農民研究の方法を積極的に受容し、「農民学 крестьяноведение」の構築に向かっている。⁵ そして、T.シャーニンとの共同編者として、一連の『農民学』の叢書を刊行していくことになる。ここでは、農民革命論とともに、農民のメンタリティーと共同体における彼らの行動に関しても、ダニーロフは研究を組織し先導している。⁶

このような1990年代のダニーロフの多様な分野での活動と並行して、ソヴェト史学を継承し、その発展を目指す活動も継続している。ペレストロイカからソ連の崩壊を受けて、ロシア革命と農民をめぐる論点も大きく展開していくことになる。ロシア革命70周年はペレストロイカの最中に迎えられるが、その研究はブルジョワ民主主義革

3 В. П. Данилов, Дискуссия в западной прессе о голоде 1932-1933 гг. и «демографической катастрофии» 30-40 годов в СССР. «Вопросы истории», 1988, №3, С. 116-121.

4 В. П. Данилов, Сталинизм и советское общество. Письмо в редакцию. «Вопросы истории», 2004, №2, С. 175.

5 Современные концепты аграрного развития (теоретический семинар). «Отечественная история», 1992, №5, С. 3-31; 1993, №2, С. 3-28.

6 В. П. Данилов, Л. В. Милов (от. редакторы), Менталитет и аграрное развитие России (XIX-XX век). М., 1996. ここに収録されたダニーロフ夫妻の論文も参照されたい。Крестьянская ментальность и община, там же, С. 22-39.

命の社会主義革命への「成長転化」というソヴェト体制の旧来の枠組みのなかで続いていた。⁷ しかし、ソ連崩壊とそれ以降の1990年代に歴史学は大きく転換し、新しい方向を提示し始め、この方向転換のなかで、ソヴェト体制でスターリン批判のなかから革新を進めてきた二人の歴史家、П.В.ヴォロブーエフとВ.П.ダニーロフも積極的に発言し行動していくのである。

1993年4月に第二回モスクワ国際歴史家大会が開かれるが、そこで彼らは自らの立場を表明し伝えている。ダニーロフは、ペレストロイカの初期に歴史家は黙して待機的に対応し、時評家や作家、劇作家に遅れたとし、現代の歴史学は危機にあり事態に遅れずについていけず、「時代の問題」に適切に応えることが出来ないと、歴史学の危機を訴えた。⁸ ヴォロブーエフは60～70年代のソヴェト史学での「新方向」を紹介し、それがアカデミー会員のС.П.トラペーズニコフをはじめとする「党イデオログ」により「破滅的影響」に曝され挫折させられたことを報告していた。⁹ ドイツから参加したМ.ライマンは、1960年代のチェコスロバキアとソ連の歴史学について述べ、1968年の「プラハの春」で動いた歴史家たち200人以上が研究活動をやめるか国外に出ることを強いられ、ライマン自身は西側へ脱出し、「60年代の理念」を発展させたと、報告した。¹⁰

ヴォロブーエフは、70年代に抑圧された「新傾向」の復権を主唱しつつ、新しい研究の方向について発言し続けている。それは、「革命と人間」をテーマとするシリーズの学術会議から窺えた。この学術会議は、1995年11月14-15日と、翌年の5月23日に第2回、第3回の会議をモスクワで開いているが、ヴォロブーエフはこの「革命と人間」シリーズの研究会議を主導し、政治＝経済から社会＝心理の方向へと革命史研究の新しい転換を促していた。¹¹ ここでは、革命における人々の性向が問題提起され、革命のなかで生まれた「暴力」をロシア人の民族的心理、さらに文明のなかで解析していこうとする方向が提示されていた。また、1997年の革命80周年にあたり、二つの学術会議が開かれるなかで、ヴォロブーエフは革命研究の新たな方向性を示唆していた。この年の2月4-5日に開かれた二月革命に関する会議では、ロシア科学アカデミー「ロシアにおける革命史」学術会議を代表して、ヴォロブーエフはその開会の言葉で、二月革命があたかも十月の陰になっているという誤ったテーゼを正す必要があ

7 Н.Н.Смирнов. Обсуждение проблем революционного процесса в 1917 году. «Вопросы истории», 1988, №4, С. 93-95. ここでは、1987年10月26-27日に革命70周年に合わせレニングラードで開かれたシンポジウム「ロシアの労働者階級 その同盟者と1917年の政治的敵対者」での論議が紹介されている。

8 Л.П.Колодникова. Историческая наука России в XX веке. Международная конференция историков в Москве. «Вестник РАН», 1993, Т. 63, №10, С. 922.

9 Там же, С. 923. この「新傾向」の学者として、ヴォロブーエフはК.Н.Тарновский, А.Я. Аврех, А.М. Анфимов, Л.Н. Иванов, П.Г. Галузо, М.Я. Гехтер, そして自らを挙げている。

10 Там же, С. 923. ライマンの経歴については、拙稿「研究ノート(Ⅰ)」34頁、注25を参照。

11 В.Л.Телицын. Две научные конференции по проблеме "Революция и человек". «Отечественная история», 1997, №1, С. 191-3.

ると述べ、ロシアの民主的革新のどのような可能性が失われたのかを明らかにする重要性を訴えた。また、閉会の辞では、彼は、1917年の革命を「二月」と「十月」に革命過程を分断するどのような根拠もないと断言した。¹² これは「二月」の意義を確認し、「二月」と「十月」をロシア革命として総合的に把握することへの提言であろう。十月革命に関しては、この年の10月21-22日の学術会議で取り上げられることになった。しかし、この会議に彼の姿はなく、会議は彼を追悼することから始まったのである。¹³

1917年のロシア革命は、社会経済構成体の移行と階級的アプローチの枠組みのなかで「二月」から「十月」への革命の「成長転化」論ではなく、「二月」から「十月」を一貫した革命過程とし、そこでの民衆(人民)の意識を文明論的に解く方向へ転じたのである。そこでは、ロシア人の民族心理的な「暴力のストヒーヤ」の歴史的形成や「共同体革命」という用語で農民が扱われることになったのである。

さて、ソヴェト史学の反スターリン傾向を1990年代に継承し、先導したもう一人は、ダニーロフであった。彼は、ソ連崩壊後の一連のセミナーでロシアの農民と共同体の新しい把握を提起した。1992年2月27日には、ダニーロフの指導のもとで現代の農民学の概念に関する最初の理論セミナーが開かれた。ここでは、米国のジョン・スコットの「モラル・エコノミー」の概念の検討から始まった。¹⁴ 第2回は同年の6月に行われ、ここではテオドル・シャーニンの農民論の検討をダニーロフが行っている。¹⁵ つづいて94年の2月25日に開催されたセミナーでは、1960年代にソ連で展開した共同体をめぐる研究と論争を紹介し、それが1970年代半ばに共産党中央委員会の学術部長トラペズニコフによって中断された経過を述べ、その研究の再開を伝えていた。ここでは、アメリカの社会人類学者R.レッドフィールドの農民研究や農村社会学のT.シャーニンの研究に注目しながら、社会構成体の枠組みを超えた新しい農民研究の方向を提示した。このセミナーの参加者からは、マルクス主義の農民理解からの脱却も訴えかけられた。ある論者は、封建制の下では農民経営は「原始的」とみなされ、資本主義の下では封建的、あるいはアジア的と性格づけられ、社会主義の下では資本主義的とされる論点を批判し、農民学の分野では、マルクス主義のアプローチとともに、文明論と世界システムにもとづく三つの方法論的アプローチがあることも主張されたのである。¹⁶ 農業の発展に関するこの理論セミナーとともに、94年6月には、農民の

12 С. Е. Руднев. 1917 год в судьбах России и мира. Февральская революция: от новых источников к новому осмыслению. «Отечественная история», 1998, №1, С. 206, 209.

13 В. Л. Леонидов. 1917 год в судьбах России и мира. Октябрьская революция: от новых источников к новому осмыслению. там же, 1998, №4, С. 206-9.

14 Современные концепции аграрного развития (теоретический семинар). «Отечественная история», 1992, №5, С. 3-31.

15 «Отечественная история», 1993, №2, С. 3-7.

16 Современные концепции аграрного развития. теоретический семинар. «Отечественная история», 1994, №6, С. 4-6, 18, 22, 23, 28.

社会的心性と共同体をめぐる国際会議も開かれている。これは、民衆の心理、メンタリティー、日常性と習慣の歴史など新しい分野へ向けての試みであり、組織委員会の副議長としてダニーロフは参加し、夫妻での報告もなされている。¹⁷

このような新しい研究方向への動きとともに、政治に積極的に関与することにもなった。1991年8月のクーデター失敗の直後の9月にダニーロフらが出した政治声明と同じく、ダニーロフは1990年代を通じて現実の政治に厳しい批判をおこなったのである。それは、1993年の12月と翌年の12月と二回にわたり開催された国際シンポジウムでのダニーロフの報告と発言に明瞭に現れた。この国際シンポジウムは、ロシア社会の体制移行と社会的選択をテーマとし、主宰した社会学者のT.I.ザスラーフスカヤによると「ロシア社会の移行に関連する過程への深い客観的な分析」を目的としていた。彼女によると、歴史家が今日の緊急の問題のみならず、ロシア史の深い長期的分析とそれが今日の選択へ与えた影響に関して報告討論することで、この会議は歴史家の研究に期待を寄せるものでもあった。¹⁸

この第一回シンポジウムは12月17から19日までモスクワで開かれ、その第3パネルで、ダニーロフは「ポスト・ソヴェト期ロシアの農業改革（歴史家の視点）」と題して報告した。ここで、ダニーロフは1991年12月末から92年1月に始まった農業改革の運命について述べ、厳しい批判を展開した。彼は、この改革のイデオロギーによれば「集団化」とは「農民解体」であったとされ、「脱集団化」は「農村の農民化」となるとされたのだが、その農業改革は頓挫し、破産は私的生産形態に限らず、その崩壊が農業全体に及んだと報告した。¹⁹ また、この改革が「上からの官僚的 <革命>」としての性格を持って実施されたとし、この冬にはじまった私有化に対して農民の抗議が起き、その実施が見直されたことを指摘した。彼は、さらに農業改革で生み出された「個人経営」に関する社会学調査の結果を示し、その「個人経営」の三分の二が都市住民によるものであり、彼らの大部分は「商人=ファーマー」と「企業家=ファーマー」で、地方の行政官と結び不当な汚い利益をあげ、土地を略奪しており、これが地方住民との対立を生み出していると指摘する。農業革命の運命は、「本来、農村の住民」が、何よりもコルホーズとソホーズで働いている人々が決定することであると、ダニーロフは主張する。²⁰ 彼は、自由で効率的な労働に立脚した農業生産のために求められる農業改革は、「真の自治」をコルホーズとソホーズの勤労集団に与え、経営形態選択に真の自由を与えることから始めるべきであるとする。さもなければ、改革は「上からの革命」であり、それを実施する「管理機構」がその利己目的をめざすことになる

17 В. П. Данилов, Л. В. Милов (от. редокторы), Менталитет и аграрное развитие России (XIX-XX век). Материалы международной конференции. Москва 14-15 июня 1994 г. М, 1996.

18 Т. И. Заславская. Л. А. Арутюнян, общая ред., Куда идет Россия? Вып. 1 М., 1994, С. 3, 6.

19 Там же, С. 125.

20 Там же, С. 128.

と警告する。彼は、上からの急速な農業改革が全面的集団化にも比定できる結果をもたらしかねず、ストルィピン改革でもその実現には20年を求めていたことに注意を喚起する。現代の「全面的ファーマー化 сплошная фермеризация」は、農業に従事する大部分の人々を投げ捨て社会問題を生み出すと、彼は鋭く警告するのである。²¹

ダニーロフはシカゴ学派による「崩落的 обвальная」経済改革は、国民経済の全ての分野に破局的衰退をもたらしたが、何よりも農業に重い打撃を与えたと指摘する。商品とサービスの価格自由化が都市と農村の交換の不均衡を拡大させ、農業機械の生産の減退が農業に大きな困難をもたらしたと、国家の農産物への不払いの累積、そして農業の全ての経営形態において収支が欠損にあるとする。そして、1990-93年の農業・畜産の落ち込みが著しく、これら全てのことが自然災害もなく戦争もない自然条件には恵まれた年々に生じているとし、社会は「持続可能性の問題 проблема выживания」に直面していると指摘する。²² また、改革の肯定的な側面として、個人小経営（コルホーズ・ソホーズの副業経営、都市民による菜園経営）の増大がしばしば挙げられるが、これは大規模な商業生産の崩壊と全般的な農業危機の結果であり、その証明であり、農業の「家族＝消費規準へ向けた後方への滑落」であり、改革の目指す現代的水準の大規模農業ではないと、断言する。彼は、このように進行する農業改革を全面的に批判し、最悪の可能性も、つまり、独裁体制の成立と、失敗した改革を強制措置によって急進化させることも排除できないと指摘して、この報告を終えている。²³

ロシアの社会発展のオールタナティヴを問うこの国際シンポジウムは、翌年の12月15-18日に第二回大会を開いている。ダニーロフは、ここでは第5パネルを司会することになる。ソ連を代表する社会学者ザスラーフスカヤの開会の挨拶は、二つの点でシンポジウムのおかれた状況を示唆して興味深い。まず、この二回の国際シンポジウムが開催されるロシアの政治・経済・社会の緊迫した状況が指摘された。彼女は、第一回の会議は、憲法に関する人民投票の直後であり、国政選挙でのジリノフスキーのセンセーショナルな勝利の後であり、執行権と代表権とのあいだの闘争に疲れ強力な権限を大統領に寄せた時期であり、権威体制への危惧が強まった時期であったと、政治的な緊迫した状況を指摘した。もう一つは、ザスラーフスカヤが、この開会の言葉のなかで、新しい世代の研究者の登場に注目していることである。党の支配する官僚的で公的な学術機関が崩壊しつつあり、新しい研究機関と新しい研究者が生まれ、学者の世代交代が感じられると、彼女は指摘し、「60年代人の極めて矛盾に満ちた集団」に代わり、国外の学術と密接に結びついた非イデオロギー的で、新しい自由のなかで育った実務的な活動的世代が登場したことを告げたのである。²⁴ この「60年代人」

21 Там же, С.133.

22 Там же, С.134-5.

23 Там же, С.136.

とは、まさにダニーロフらの反スターリン主義を掲げてソ連体制下を生きてきた人々であり、彼らと「非イデオロギー的で」「実務的な活動的世代」との交代という状況が生まれているのである。

シンポジウムは、ソ連崩壊後のロシア社会の危機的状況と研究者の世代交代のなかで開かれているのである。第5パネルでは「広範な歴史的内容の報告」がなされるとザスラーフスカヤは、前以って会場に伝えたが、ここでは「60年代人」であるダニーロフが司会し、ヴォロブーフ、ゲフテルが報告しパネルに参加することになる。

第5パネルは「つまりロシアはどこに進んでいるか」をテーマに掲げ、ダニーロフが開会と閉会の言葉を述べている。彼は、1993年10月3-4日の事件でロシアの民主的発展への人民自身による自由な選択への「最後の期待」が消え失せたとする。そして、「権威主義 авторитаризм」は民主主義への移行段階として「何らかの幻想」を抱かせることはできたが、1993年10月以降、そのような「幻想」はまがいものとなったと指摘し、この93年10月3-4日の「政変 переворот」に関してはゲフテル、ヴォロブーフらの報告がなされると伝えた。さらにダニーロフは、第7代書記長ゴルバチョフのもとで「ペレストロイカ（再建）」は「カタストロイカ катасторойка（崩壊）」に転化したとし、「スターリンのテルミドール」で勝利したソヴェト官僚制はその支配階級としての利益をこの「カタストロイカ」において実現したと述べた。²⁵

ゲフテルは「10月3-4日、エピソードか、あるいはルビコンか」と題して報告している。この報告は12月18日のシンポジウム最終日になされており、翌年の2月15日に彼は亡くなるから、このパネル報告は恐らく公の場での最後の発言であったろう。彼は、1993年10月3-4日の事件を「モスクワの悲劇はエピソードではなかった、ルビコンであった」と結論した。²⁶ これは、1991年8月に始まった移行の決定的モメントを越えたということの確認であった。ゲフテルは「多ウクラード性」の論者の一人であり、「新傾向」を代表した「60年代人」でもあったが、70年代の不遇のなかで1976年に歴史研究所の研究員を辞め、1982年2月には共産党を離党していた。検閲を経ないサムイズダートの『探求 Поиски』を出し、異論派として活動をつづけ、1991年のソ連崩壊後は、ロシア大統領エリツィンの「公的顧問 официальный советник」にも就いていたが、しかし1993年10月事件の後、この職を辞している。²⁷

24 Т.И.Заславская, общая ред., Куда идет Россия? Альтернативы общественного развития. II. М.,1995, С3-7.

25 Там же, С.269-271.ペレストロイカの諸改革が「破局 катастрофа」へ導くと指摘し、「カタストロイカ」と批判し話題を呼んでいたのは、反体制派で国外に出国していた論理学者のジノヴィエフであった。А.А.Зиновьев, Катасторойка.1990,Лозанна.ここには、ダニーロフが時論から遅れをとる歴史学に危機を覚えつつ現状に絡みこむ巧みな用語術が窺われる。第一回シンポジウムでの「全面的ファーマー化 сплошная фермеризация」という造語にも、それは窺われる。これは、スターリンによる「全面的集団化 сплошная коллективизация」を連想させ、この用語によって、90年代に進行する農業改革への批判的姿勢とその内容への否定が連想転移されているのである。

26 Там же, С.271.

シンポジウムでの発言の前日、つまり12月17日の『独立新聞』には、「強いられた孤独からの声」と題した彼の小文が、副題に「昨年10月3-4日の流血への支払いのときが来た」と付して載せられている。この小文は、彼が12月13日に二度目の梗塞で倒れ、書き机ではなく病院のベッドから認められていた。病床のゲフテルを強く捉えていたのは「嫌悪 омерзение」であった。「我々の目の前で作り出されるものからくる嫌悪」であり「ロシアのわが運命に対する我らの恭順さへの嫌悪」であると吐露する。そして、彼は12月10-12日にロシア防衛省と内務省の武装部隊がチェチェンに進攻したことに強く抗議する。「支払いのときが来た、昨年10月3-4日の流血に対して」と述べ、戦っているのはドナーエフ将軍一人とではなくチェチェンの人々であると警告する。ロシア軍のチェチェン侵攻に強く抗議しつつ、彼はこの小文の追記に深い危惧をこめていた。「この頃は、口を利けなくなった人々がアンドレイ・サハロフの墓前で頭を垂れている。語彙から「インテリゲンツィア」という言葉を、われらの後裔が除外することのないようにと」。²⁸

ゲフテルは、1963年に『歴史の諸問題』編集部で開かれたツァーリズムの植民政策に関する審議に書面で参加し、ガルーズの帝国主義論への書評を寄せ²⁹、帝国とその植民政策への批判的解明に動いていた。さらにペレストロイカのなかでは、ガムサフルジアのレーニン宛書簡（1921年5月）を1990年に紹介し、ソ連形成期のグルジア問題の解明に逸早く向かっていた。³⁰ ゲフテルは、ロシア帝国主義への批判的検討に一貫した姿勢を貫いた人物であった。

このパネルでは、ゲフテルとともに、ヴォロブーフが「10月4日政治体制 社会的本質と展望」と題して報告した。報告では、1907年6月3日体制、つまりストルィピン体制と1993年10月4日体制には「驚くべき類似性」があり、監督と俳優は異なるが同じシナリオで展開したと指摘する。³¹ 彼はロシアにおける民主主義の「不幸 злоключение」に対し、我が国の知識人が大きな責任を負っているとし、ロシアの“民主派”や“自由主義者”に向け、次のように強い不信を述べた。「個人的には、私はずっと以前からロシアにおける民主主義の展望を我々の“民主主義者”や“自由主義者”と結びつけることをやめていた。彼らは、むしろ、その墓堀人に似ているのだ。」³² 彼は、エリツイン大統領のもとでの10月4日体制を「権威主義体制」であり、

27 Я.С. Драбкин. Памяти Михаила Яковлевича Гефтера. «Новая и новейшая история», 1995, №5, С.124-125.

28 Михаил Гефтер. Голос из вынужденного одиночества. Пришёл час расплаты за кровь 3-4 октября былого года. «Независимая газета», 17-го декабря 1994 г.

29 А.Н. Сахаров. Историческая наука в СССР. Встреча в редакции. Обсуждение вопроса о колониальной политике царизма. «Вопросы истории», 1963, №11, С. 148; М. Гефтер. Великая антиколониальная революция. «Новый мир», 1967, №7, С. 272 -276.

30 М. Гефтер. Несостоящий диалог. «Коммунист», 1990, №5, С. 89-101. この応答論文 文章 - 脱稿は1978年に書かれていたが、縮小し補足を加えて1990年に公表された。

31 Т.И. Заславская, общая ред., Куда идет Россия? С.287.

32 Там же, С.291-292.

「自由主義型の権威主義」と位置づけ、³³ この体制は資本主義化の促進を目指していると捉えている。この権威主義体制へのオールタナティヴとして、彼は、「我が国において民主主義の成果を強固にし、社会をネオ・ネップの道に発展させるような左翼オールタナティヴ」が必要であると提言したのである。³⁴

ヴォロブーフのこの報告には会場からいくつか質問が出された。その一つに、「マルクス＝レーニン主義の術語の助けをかりて」分析しようとするのは失敗を運命づけられているのではないかとこの厳しい批判に、彼は次のように応えている。「マルクス＝レーニン主義の術語に関しては、かつて自由主義の支持者たちの理念を投げ捨てるのを急いだように、それをごみ捨て場に放り出す必要があるとは、私は考えない。」³⁵

ダニーロフは、このパネルの結語のなかで自らの見解を伝えている。彼はロシア社会で進行する経済の破局について、従属的な資源輸出による発展を遂げれば「アフリカ化」として危機を述べ、ロシアの「権威主義体制」の容認を拒み、ロシアのリベラリズムの「退化 перерождение」は驚くべきものと批判した。³⁶ さらに、彼は、ソヴェト社会のシステム崩壊はゴルバチョフの指導の下で始まったと述べた。³⁷

この国際シンポでは、ダニーロフをはじめ「60年代人」が1991年のソ連崩壊から1993年の十月事件で成立した新生ロシアの政治体制への移行、さらにチェチェンへの侵攻と深刻化する経済の崩落に強い反発を示し、自由主義と「民主派」への不信と厳しい批判を行ったのである。ダニーロフは、第一回のシンポでの報告を農業改革とさらに進行する農業の崩壊への批判として展開し、第二回のシンポでの権威主義体制論を「テルミドール論」として展開していくことになる。

この1993-94年の政治＝社会的危機のなかで、ペレストロイカ期の歴史学の革新を先導したユーリー・アフナーシェフは自由主義的改革の挫折を危惧する論調を展開した。アフナーシェフは94年1月に首相のガイダルや蔵相フォードロフが政権を離脱したことに改革に向けた大きな危惧を表明した。官僚と軍産複合体によって市場経済に向けた改革が挫折し、計画統制経済へと復帰することを警戒し、1993年10月のエリツィン勝利の陰にこのような政治動向を推測した。また、ロシアの外交政策に「大国イデオロギー」の現れをみて、ロシアが帝国を取り戻そうとしていると批判する。彼は、農業では恐るべき状態を指摘し、巨大な独占体である農工コンプレックスと「アルカイック」な農業の共同体システムが社会主義の慣行と結びついたこと、そこに改革への主要な阻害要因をみて、農工コンプレックスの解体と古い共同体との関係

33 Там же, С.292.

34 Там же, С.296.

35 Там же, С.300.

36 Там же, С.327.

37 Там же, С.328.

を絶ち、私有とファーマー経営の育成を主張する。ロシアでの改革を阻害する社会勢力として、彼は、軍産複合体、集団農場の農民、そして官僚を挙げ、これら三つの社会勢力が「市場経済」と「民主主義」への妨げをなしていると主張し、「市場」と「民主主義」への道を進むことを訴えたのである。³⁸

また、歴史家で60年代にダニーロフの歴史研究所党委員会で活動をともにしたプリマーク E. Г. Плимакはテルミドール論の考察を深めた。彼は、ソヴェト体制下での改革の可能性を「自主テルミドール самотермидоризация」という概念＝視点から一連の論文でさぐった。³⁹ これは、ゲフテルのテルミドール論からも示唆を受けていたが⁴⁰、ダニーロフのテルミドール論は第二回シンポでの報告からさらに研究を進めて、2000年秋の来日の際の講演のなかで展開されることになる。⁴¹ 1993-94年の政治状況の緊迫のなかで、ペレストロイカのなかでスターリン批判を進めたアフナーシェフらの若いグループは「市場」と「民主主義」を掲げる自由主義的改革の続行を主張し、ダニーロフらの「60年代人」は「テルミドール論」に傾いたのである。ここでは、アフナーシェフの農業における私有とファーマーの育成、「市場化」を目指す改革論とダニーロフの協同組合論の立場は対極にあることを確認しておく必要がある。

VIII. 遺稿の内容

研究ノート（I）の冒頭で紹介したダニーロフの遺稿「ロシアにおける農業の運命

38 Yuri N. Afanasyev, Russian Reform Is Dead: Back to the Central Planning. *Foreign Affairs*. Vol. 73, No. 2 (March - April 1994), pp. 21-26. 同じ趣旨の論説が以下にも掲載されている。Yuri N. Afanasyev, Russia: the reformation is dead, long live the revolution. *The Asian Age*, 1 April 1994, p.8.

39 Плимак E. Г. Русский термидор: измерение 1917 и 1985. «Век XX и мир», No.2, 1996, С. 216-237. プリマークの以下の論文は、革命の正統性に立脚するソヴェト体制が「テルミドール論」をそもそも許容できない知的状況のなかで、革命の「反動」としてのテルミドールをロシア・ソ連の具体的過程のなかで探る試みであった。E. Плимак, Не рано ли нам хронить марксизм? «Общественные науки и современность», 1991, No.5; В. Козлов, E. Плимак, Концепция советского термидора (к публикации дневников и писем Льва Троцкого), «Знамя», 1990, No.7.; E. Плимак, И. Пантин, От смуты до смуты. Россия в тупике «догоняющего развития». «Октябрь», 1993, No.1.

40 Плимак E. Г. Русский термидор, С. 217-8. 1960年代に、歴史研究所の方法論部会ではゲフテルの指導で、公的なセミナーの他に彼の私的なセミナーも開かれており、ここでは密告も警戒して議事録は取られなかったが、フランス革命の運命とテルミドールも論議されていた。R. D. Markwick, Catalyst of Historiography, Marxism and Dissidence: The Sector of Methodology of the Institute of History, Soviet Academy of Science, 1964-1968. *Europa - Asia Studies*, Vol.46, No.4(1994), pp.589-590. マークウィックのこの論文は、ゲフテルを中心に「60年代人」が方法論部会でスターリン主義を批判しマルクス主義の歴史認識における歴史過程の「多様性variantnost」と「選択可能性alternativnost」を探る知的活動として紹介している。この方法論部会で、ダニーロフも「社会主義のもとでの階級の特徴」という報告を、1964年11月11日に行っている。op.cit., p.582.

41 ヴェ・ベ・ダニーロフ (広岡直子 訳) 「ソヴィエト社会の崩壊・分解、制度的危機、あるいはテルミドールのクー・デター?」『ロシア史研究』68号 (2001年5月)、130-140頁。

(1861-2001年)は、このような状況のなかで書き継がれ、それをもとに、それぞれの政治状況のなかで個々の論文として発表されたものである。それは、ロシアにおける農業の発展、改革と革命に関する三つの論文である。⁴² ダニーロフのこの原稿、そして彼が死去した今となっては遺稿となったが、ソ連崩壊後の1990年代をへて21世紀に入っていく時代のなかで、現実のロシア農業が社会主義体制から市場経済への移行に際して陥った危機に鋭く対峙しつつ、ロシア農民・農業史を新たに捉え直そうとしたものとして、我々の許にあるといえよう。

さて、この遺稿の内容＝論点に付いて、紹介しておこう。まず、「資本の本源の蓄積」という近世から近代にいたる資本主義の歴史的形成過程のなかで農業と農民が一貫してとらえられている。この歴史的パースペクティブは、勿論マルクスの『資本論』第一巻の第24章「いわゆる資本の本源の蓄積」を基底にしており、これがダニーロフの基本的視座として提示されている。この歴史的パースペクティブのもとで、「西」の先進諸国と「後進」ロシアの、そして、この歴史過程を追^{キャッチアップ}捕しようとする「改革」とそれへのロシア農民の反発、さらに「革命」が位置づけられる。この長期にわたる資本主義の形成と発展を、シードロフ学派と「新傾向」の研究者がもたらしたロシア資本主義発展の特殊性認識に基づいて、ロシアの一世紀半におよぶ農業と農民の歴史を捉えていこうとするのである。

第二に、遺稿では、著者ダニーロフの農民の立場からの農民革命の視点が打ち出されている。1902年から1922年を農民革命の時代の枠組みとしてとらえ、そこでの「改革」と「革命」の対抗が論じられている。この農民革命論は、1990年代に明確に提起され、それまでソヴェト史学においては都市の革命運動に付随し個々の時期に、労農同盟との関連で革命党の指導という視点から分析されてきた農民運動を、全体として独自の「革命」として総括したものである。⁴³ これは、ベレストロイカ期のゴルバチョフ改革とソ連崩壊後の1991-93年の社会変革、とりわけ農業改革と農業の崩落的な生産減退への批判とも関連していたため、ロシアの歴史学において「全く否定的に」うけとられたのである。⁴⁴

42 以下の三つの論文である。1) В.П. Данилов. Аграрные реформы и аграрная революция в России. «Великий незнакомец. Крестьяне и фермеры в современном мире». Хрестоматия, сост. Т. Шанин, М., 1992, С. 310 - 321; 2) его же, Аграрные реформы и аграрные революции в России (1861 - 2001). «Россия в XX веке. Реформы и революции», под общей ред., Г.Н. Севостьянова. Т.1, М., 2002, С. 20-37; 3) его же, Судьбы сельского хозяйства в России (1861-2001 гг.). «Крестьяноведение», вып. 5, М., 2006, С. 10-29.

43 1990年代以降、ダニーロフによる史料公開も農民研究も、この農民革命論に基づいている。多くの論考があるが、例えば、次を参照。В. П. Данилов. Крестьянская революция в России. 1902-1922 гг. // Крестьяне и власть. Материалы конференции. Москва- Тамбов, 1996, С4-23.; Виктор Данилов. Не смей! Всё наше! Крестьянская революция в России. 1902-1922 годы. «Россия», №7, Июль 1997, С.15-19.

44 М. А. Вылцан, В. А. Емелев и. Н. Слепнев. Творческий путь Виктора Петровича Данилова, «Вопросы истории», 2005, №9, С. 156.

第三に、この農民革命の視点から、著者ダニーロフは農民の自主的な協同組合による農業の組織化の可能性を提示し、それがスターリンの農業集団化、さらに帝政時代に溯りストリピン農業改革への否定的評価へ連なっている。ここではチャヤノフの協同組合論、そしてブハーリンの理論にも言及され、ストリピンの農業政策とスターリンの農業集団化へのオールタナティブとしてネップに依拠したレーニンの協同組合への展望が提示されている。ここで援用されているオールタナティブ論は、すでに60年代のスターリン批判のなかでA.Я.グレーヴィチによって提起された歴史哲学的なものとは性格を異にしている。グレーヴィチのもとでは、人間の創造的活動と歴史の多様な可能性に視野を拓くものとして主張され、史的唯物論の硬直した法則の必然性と党の指導に対する自由な可能性を含意するものであった。⁴⁵ また、E.H.カーが『歴史とは何か』のなかで、if-historyの問題として、西側での「未練学派」のロシア革命論を批判しつつ紹介したのものとも異なっている。⁴⁶ ここでのオールタナティブ論は、ペレストロイカのなかで革命の正当性や政策の妥当性を問い、ロシアの現実的可能性を探り歴史に新しい解釈を迫るものとして盛んに論じられたが⁴⁷、ダニーロフもその論調のなかにいたのである。

第四に、ダニーロフの、スターリン集団化以降のソ連農業への批判的アプローチである。このソ連農業への厳しい評価は、彼のオールタナティブの視点を基底にしているが、また、「ゴルバチョフ・エリツィン改革」とポスト・ソヴィエト期の農業政策への厳しい評価につながっている。ここでは、農民、あるいはコルホーズ・ソホーズの勤労集団の主体性を否定し、官僚急進主義のもとで行政措置をもって遂行される「改革」への農民の立場からの批判である。

草稿のこれらの基本的枠組みに基づいて、個々の論文がそれぞれの歴史政治状況のなかで公刊されたのであるが、それらの発表論文には見られない重要な論点が草稿にはいくつかある。それは、まず、彼のシードロフ学派への高い評価と共感である。この共感のなかでダニーロフの農業＝農民史研究の理論的枠組みはつくられたと思われる。1960年代半ばに、このシードロフ学派を母体として生まれた「新傾向」は、72-7

45 A. Я. Гуревич. Об исторической закономерности. «Фирсовские проблемы исторической науки», М., 1969, С. 63, 76-77.; 和田春樹、「転換するソ連歴史学1968-70年」『社会科学研究』第37巻5号、1985年12月、76-77頁。

46 E.H.カー『歴史とは何か』岩波新書、1962年、142-144頁。

47 ペレストロイカのなかで「新傾向」派の論陣の先頭に立ったヴォロブエフは、1987年にいち早く「オールタナティブ」の方法を提起したが、受け入れられる状況にはなかった。88年1月の歴史家円卓会議での彼の発言を参照されたい。《Вопросы истории》, 1988, №3, С. 36-37. しかし、87年の末には、彼は、1917年の革命研究の現状に関して革命史が単純化され内容を貧しくしており、革命の過程が勝利へと前以て定まっているかのように叙述されていると批判し、革命研究の具体的課題として歴史における「オールタナティブ」理念の復権を、第一に挙げていた。ちなみに第二には、革命的知識人と民衆の関係、民衆からの彼ら知識人の離反の問題であり、第三に、後に反党活動で粛清された人々が革命の研究と叙述において抹消されていること、つまり「無記名性 обезличие」の克服をあげていた。П. Волобуев. Великий Октябрь. «Наука и жизнь», №11(ноябрь) 1987, С.14.

4年に壊滅されるに至るが、このソヴェト史の転換のなかに、広い意味ではダニーロフも位置している。ダニーロフはシードロフの直系の学徒ではなく、研究ノート(I)でみたように、通常、彼をシードロフ学徒として挙げることはない。彼の指導教官は、C.И.ヤクボーフスカヤとM.Φ.キムであった。⁴⁸しかし、彼の「60年代人」というアイデンティティはシードロフ学派との共鳴のなかで生まれた意識ともいえる。この「新傾向」が提起した論点は、二月革命における党の指導性、労働者の意識性と組織性、そして革命過程におけるヘゲモニー、十月革命における階級同盟と民主主義的性格の問題など多岐に及び、スターリン批判を受けて展開した1960年代のロシア史研究のさまざまな革新への動きの波頭にあった。

とりわけ、革命前ロシアの社会・経済構造に関する「多ウクラード性」の論点では、農業分野での地主制のもとでの遅れた農業構造と十月革命の全農民的な民主主義的な性格を指摘し、積極的な役割を果たしたのはアンフィーモフであり、帝国の植民地構造の解明に尽くしたガルーズであった。とりわけ、この「新傾向」のなかで帝政ロシアの農業問題を論じたアンフィーモフに寄せるダニーロフの評価の高さは重要である。⁴⁹

シードロフ学派の生み出した「新傾向」の理論的=知的枠組みのなかから、彼の「西」の先進に対する「後進」ロシアという第一の位置づけ、さらに第二の論点である農民革命論は密接に関連して提起されている。

最後に、この草稿は2001年までの記述で終わっている。B.プーチンが大統領代行として、2000年2月に農工コンプレックスに関する全ロシア会議で農業政策に関して発言したことを紹介しつつ、ダニーロフはプーチン政権の農業政策を見守るとの姿勢

48 奥田 央「ダニーロフ」、342頁。1966-68年のダニーロフの党委員会のもとで歴史研究所での二人の立場は異なっていた。キムはスターリン批判に対して、否定的経験のみでなくその客観的評価を求め、スターリン批判の急進化に抑止的であった。これに対して、ヤクボーフスカヤ女史は歴史研究所のなかで1960年代に一貫してスターリン批判を強く主張していた。《Вопросы истории》, 2007, No.12, С.51-52, 90, 92; Там же, 2008, No.1, С.62-63.

49 アンフィーモフと日本のロシア農政史研究者、日南田静真との交流については、次を参照。松井憲明「働き盛りの日南田先生-1970年代」『想い出の記 教育者・研究者そして人間としての日南田静真』(2007年、山愛書院)、62、64頁。シードロフの学徒アンフィーモフ A. M.(1916-1995)の研究歴については、次を参照。A. A. Чернобаев. Историки России. Кто есть кто. 2000, Саратов, С.31.ダニーロフの彼への高い評価は、彼の編纂で準備され彼の死後に公開された農民運動史料集(1901-1904年)へ寄せたダニーロフの「序文」に明らかである。ダニーロフは、1902年を中心に扱ったこの史料集がシリーズ『農民運動史料集』のなかで最後まで刊行を許されなかった背景とソヴェト史学の「ドグマ的公式」を問題としている。ここで、ダニーロフは、1902年に始まり1922年に終了する彼の農民革命論を提示しつつ、アンフィーモフが「公認歴史学」に対立し、タルノフスキー、ゲフテェル、ヴォロブーフらとともに「イデオロギー的(行政的)ボグロム」を受け、このグループの単にアルファベット順だけでない先頭にたった人物であると指摘した。А.М. Анфимов (Ответ. ред.), Крестьянское движение в России в 1901-1904 гг. Сборник документов. М.,1998, С.5-7.アンフィーモフは70-80年代の「新傾向」への抑圧のなかで、1980年に党中央委員会学術部の圧力で自説(1959年の自著で述べていた半農奴制的関係が支配的との)の撤回を強いられ、自らの「誤り ошибочность」を述べざるをえなかった。Анфимов А.М. Крестьянское хозяйство Европейской России. 1881-1904.М.,1980, С.7 ; В.В. Поликарпов. «Новое направление» 50-70 х гг. : последняя дискуссия, С.371; В.И. Бовыкин. Россия накануне великих свершений. М.,1988, С.35.

で筆を擱いている。21世紀のその後の農業政策への評価、そして、その基礎となるソ連崩壊後の1990年代から現在に至る20年間のロシア農業の危機の分析、そしてその再生の方向に関しては、我々に突きつけられた新たな研究課題となっている。

ダニーロフのこの遺稿は、ソ連体制崩壊後の1990年代から21世紀の初めまでの十年余の彼の研究の基本を示している。ソ連体制のもとで体制内の批判派として、その後のペレストロイカ、さらにソ連崩壊後の政治状況のなかでの研究者ダニーロフの知的軌跡を探るうえで、この遺稿は有益である。ペレストロイカのなかで「60年代人」として「新傾向」の歴史学の復権を求め登場した彼らは、レーニン主義の立場からのソヴェト史学の最後の闘争を展開した。このソヴェト史学終焉のいわばしんがりやをダニーロフは担ったのである。この遺稿と1992年、2002年、そして死後の2006年に公開された三つの論文を比較考証すると、ソ連崩壊後のロシアの「現状」と交錯しながら公開された論文の「政治性」も明らかとなってくる。

遺稿と対照すると、2006年に公開された論文「ロシアにおける農業の運命（1861-2001）」が遺稿テキストの内容を最も反映しているのであるが、この論文も、いくつかの点で遺稿からの注目すべき削除がある。まず、遺稿で述べられていたシードロフ学派と「多ウクラード性」についての研究史上の意義について述べたところが、公表された全ての、つまり1992、2002、2006年の論文全てにおいて削除されていることである。これは、ソ連崩壊以降の新生ロシアにおいて、ソヴェト史学において反スターリン主義を進め、70年代以降はブレジネフ体制下で圧服されたシードロフ学派とその「新傾向」の研究者に対して、ペレストロイカの半ばまでに彼らの復権と歴史研究における主導性が回復されたかにみられたにも拘わらず、90年代以降は、彼ら进行评估し、その研究を公開し受け入れることが困難となった状況を示唆している。

第二に、遺稿にある都市と農村の結びつき、労働者と農民の結びつきを述べたところは、2006年の論文では一つのパラグラフ全体が削除されている。また、2006年論文では、遺稿テキストの最後の五行のプーチン政権の農業政策を見守っていくという部分が全く削除され、ロシア農業に明るい兆しが認められると結ばれている。さらに、遺稿の最初のパラグラフでの農民の犠牲のうでゴルバチョフ＝エリツィンの改革を含め一連の改革がなされたという部分が全く削除されている。したがって、遺稿の結びと最初の部分のこのような公開に際しての改訂は、農民を犠牲にした農業改革に対するダニーロフの批判的姿勢を希釈し、研究史のなかで彼が評価する「多ウクラード性」論を全く削除し、研究の実証部分は残したかたちになっている。また、2006年論文では、遺稿にある「現代の歴史文献では」としてストルィピン農政を厳しく批判した一パラグラフが欠落するのである。⁵⁰

50 《Крестьяноведение》, вып. 5, М., 2006, С.17.に該当する部分。

このように見てくると、遺稿は、1992年、2002年、そして2006年に公刊された論文を貫き包括する基底的な論考であるが、公刊の時期とその時局での政治状況や「世論」と絡み合っただけで配慮がなされ、テキストからの削除と改訂がなされたことがわかる。ダニーロフというソ連体制下でスターリン批判を担った「60年代人」にして優れた一人の研究者の、ソ連崩壊後の90年代から21世紀初めにおける研究、そして「60年代人」の彼の「最後の闘争」を概括し継承するためには、遺稿とこれら公刊論文の全体を比較参照しつつ、そこに漲る彼の農業を取り巻く体制への批判的姿勢を見失ってはならないだろう。

結びにかえて

ダニーロフは、帝政ロシアと革命、そしてその後のソ連体制が抱え込んだ農民＝農業問題を広い歴史的視野から考察する研究者であるとともに、ソ連という社会主義体制の苦悩を体現する人物でもあった。彼は、欧米の農民＝共同体研究を先導したT.シャーニンや、農業集団化研究のM.レヴィンらとも呼応して国際的な研究を組織し⁵¹、1990年代には「農民主学」の新しい研究の構築を志向していた。また、日本のロシア農民＝農業史研究にたずさわる人々にも強い影響を与えてきた。彼の研究成果は、日本でいち早く論集としてまとめられ上梓されたし⁵²、1987年に初の来日を果たし⁵³、2000年秋の再訪では、ロシア史研究会の大会で講演し、ペレストロイカの結果とポスト・ソヴェト社会に「テルミドール反動」を見て厳しい批判を展開した。⁵⁴

51 モーシュ・レヴィンMoshe Levinの研究については、石井規衛氏による翻訳紹介がある。E.P.トムソン、N.Z.ディヴィス、C.ギンスブルグ他（近藤和彦・野村達朗編訳）『歴史家たち』名古屋大学出版会、1990年、23-58頁。M.レヴィンのソ連崩壊後の歴史研究への批判の一端については、次を参照。溪内謙『現代史を学ぶ』岩波新書、1995年、148、150頁。また、溪内氏のダニーロフへ寄せる共感、この新書の処々に窺える。132-3、138頁。

52 B.П.ダニーロフ著 荒田洋・奥田央訳『ロシアにおける共同体と集団化』御茶の水書房、1977年。この訳書に付された「解題」は、日本のソヴェト農業研究者がいかにダニーロフの研究に、その農業集団化と農村共同体の実態把握において注目し、その内容の受容に努めてきたかを示しており、彼の研究成果に関する優れた紹介である。

53 ダニーロフは到来したペレストロイカのエイフォーリアのなかで、モスクワ、ついで東京で和田春樹に出会ったと回想し、20年来の国外出張への禁圧から解かれ、初めて1987年秋に東京に滞在したと想起している。В.Данилов. Из истории «перестройки»..., С.413.ダニーロフの1987年10-11月の滞在与、11月20日に東大経済学部でおこなった講演は次に紹介されている。ヴェ・ベ・ダニーロフ「協同組合・集団化・ペレストロイカ」『経済学論集』（東京大学経済学会）第54巻第3号（1988年10月）、129-136頁。この訪日に際し、ダニーロフの研究への期待をこめた紹介がなされている。奥田央「ソ連史研究とダニーロフ氏」『朝日新聞』1987年12月7日、夕刊。

54 大会での講演は、つぎに掲載された。ヴェ・ベ・ダニーロフ（広岡直子訳）「ソヴィエト社会の崩壊 - 分解、制度的危機、あるいはテルミドールのクー・デター?」『ロシア史研究』、68号（2001年5月）、130-140頁。この講演を「政治的アジェンダ」とし、「一級の歴史家」への「痛ましい思いを禁じ得なかった」との感想を塩川伸明氏は伝えている。『ロシア史研究会ニューズレター』No.41（2001年2月）、6頁。しかし、この「政治的アジェンダ」に、ダニーロフの研究への情熱が凝縮されていたと、私は考えている。

スターリン批判の時代に1960年代の半ばから1970年代初頭に展開された「新傾向」の学派にダニーロフは共鳴し多くを負っている。この学派、そして60年代に反スターリンのなかで進展した様々な潮流は、ペレストロイカのなかで復興し、ソヴェト史学で優越したが、1991年8月のクーデターとその失敗、そしてソ連崩壊、1993年10月のエリツィンの政変により、ソヴェト体制をその内から批判する彼らの立場は、体制自体が否認され崩壊するなかで足場を失われていき、ソヴェト史学は終焉を迎えた。60年代にダニーロフとともに科学アカデミーの歴史研究所で、その党委員会を闘ったタルノフスキーは、歴史学でのペレストロイカがまさに始まろうとする時期に死去した(1987年7月8日)⁵⁵。ついで、1995年2月15日にゲフテルが死去し、9月末の30日にはアンフィモフの死が追った。そして、1990年代をともに闘ったヴォロブーフが1997年9月30日に死去し、最後にダニーロフが逝った(2004年4月16日)。彼らが担ったソヴェト史学の一世代と「新傾向」派は、こうして終焉した。

ダニーロフは、この「60年代人」研究者の最後の、そして一貫した立場の学者であった。現在のロシアの歴史学をめぐる状況は、かつてのソヴェト史学のような共産党がイデオロギーを独占支配し、その一元的な強い統制の下にあるわけではなく、リベラル=民主派から共産主義者まで、またそれぞれの地域の民族=宗派に依る民族国家論から広い文明史論まで多様な関心のもとに、多元的な知的潮流のなかにある。新たな歴史認識におけるこのようなプルーラリズムのなかで、ソヴェト史学の革新に向けた知的遺産を整理し、批判的に継承し、革命とソ連という20世紀の現実の社会主義「体制」の護教論に堕さない新たな知的営みが、求められているように思える。

また、ダニーロフの農民革命論、オールタナティヴ論で提起された小農民の協同組合を通じての農業、そして社会の自主的な発展という展望は、世界的規模での自然環境の破壊と耕作の単一モノカルチャー化、そしてアグロビジネスの展開、生態系とそれと有機的に関連する農業が担う伝統文化への危機のなかで、小農民の自立的な協同社会へ向けて再考に値するものであろう。ダニーロフの「農民学」は、21世紀に向けた新しい学際的研究として現代の危機からの脱却へ向けた展望を模索していたともいえる。

ダニーロフ再読は、このような学際的研究に向けた一つの契機であるとともに、体制と研究者の知的距離のありかたも、彼の盟友ゲフテルが病床で想起した「インテリゲンツィア」と「60年代人」という意識のつながりのなかで問われているようにも思われる。1960年代に進展したソ連でのスターリン批判と反体制派の活動や異論派の登場は、サハロフ博士、文学者ソルジェニーツィンやトヴァルドフスキー、社会評論家メドヴェージェフといった人々の活動から広く知られてきた。⁵⁶ しかし、ソ連科学

55 和田春樹氏はタルノフスキーの急死の知らせを聞き、7月10日の葬儀に参列し、その記録を次のように残している。「タルノフスキーの同志ダニーロフの沈んだ声」での弔辞は「60年代の情熱を甦らせたようであった。」和田春樹『私が見たペレストロイカ』、岩波新書、1987年、119-122頁。

V.P.ダニーロフ 再読 -批判的継承に向けて- (Ⅲ)

アカデミーの歴史研究所という革命と社会主義体制の正統性を担う中心的な学術機関において繰り広げられた研究と政治の関係は、表面的に公表を許される狭い範囲において、しかもエピソード的にしか知られることはなかった。ダニーロフ再読によって、1950年代半ば以降のソヴェト社会と学者の研究の係わり、社会主義の体制と共産党の政治支配の正統性と権威を担ってきた歴史研究所、その党委員会での1966-68年の二年にわたるダニーロフの党書記としての活動⁵⁷、スターリン批判と農業・農民研究にささげた軌跡は、その政治的限界を含め貴重な知的遺産として残されているように思える。ダニーロフ再読は、社会と歴史研究の結びつき、ソヴェト知識人、とりわけ「60年代人」の思想史へも我々を導き開いてくれるように思える。

*この研究ノート(Ⅰ)、(Ⅱ)、(Ⅲ)は、ダニーロフというソヴェト体制のもとにあって優れた歴史家を「歴史する」という無謀に近い試みである。E.H.カーの『歴史とは何か』の響にならない事実の研究を始める前に「先ず歴史家を研究せよ」と銜うこともできるが、ダニーロフという一人の研究者を個別「列伝」として追うのではなく、可能な限り歴史家たちの群像のなかで彼らとの連関において、ソヴェト史学の研究において捉える試みでもある。畏友松井憲明氏の「教唆」と様々な支援が、この試みに向かわせたとも思える。しかし、残念ながら、遺稿の翻訳は果たせないままになった。スラブ研究センターの兎内勇津流氏からは貴重な学術情報の提供をうけ、本務校たる静岡県立大学図書館の司書樋泉玲子さんには資料の取り寄せに尽力して頂いた。これらの人々の支援に、この研究ノートの試みは多くを負っている。また、私の演習でE.サイドと彼のオリエンタリズムを扱った際に、彼と並ぶ優れた現代の歴史家としてダニーロフをゼミナリストに紹介したことへの、私の教師としての責はいくらか果たせたと思っている。

56 ロイ・メドヴェージェフは、ダニーロフと同じ時期に教育学アカデミーの研究員であり、彼によってスターリン批判とその担い手たる「異論派」の人々の群像が、国外に広く紹介されてきた。しかし、トラペズニコフに触れられてもダニーロフへの言及はない。ロイ・メドヴェージェフ著(佐藤紘毅 訳)『ソ連における少数意見』岩波新書、1978年。

57 Партийная организация Института истории АН СССР в идейном противодействии с партийными инстанциями. 1966-1968 гг. «Вопросы истории», 2007, №12, С.44-80; 2008, №1, С.61-95; №2, С.44-83. 当時の科学アカデミー歴史研究所はソ連における主導的学術研究機関であり、1967年の時点でレニングラード支部を含め665人の研究員を擁し、その党組織には党員371名、同候補7人が属していた。この歴史研究所の党委員会、ダニーロフは1966-67年の二年間わたり書記を務めた。Там же, 2008, №1, С.83.